

Title	英語における統語的局地化現象
Author(s)	福地, 肇
Citation	大阪大学, 1992, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/38420
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏 名	福 地 肇
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 1 0 4 4 3 号
学位授与年月日	平成 4 年 11 月 2 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	英語における統語的局地化現象
論文審査委員	(主査) 教授 河上 誓作
	(副査) 教授 藤井 治彦 助教授 大庭 幸男

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、英語の意味的概念構造を統語構造として実現する際にはたらくと考えられる「統語的局地化」という言語上の過程の特徴を明らかにし、言語研究におけるその位置づけをおこなおうとする試みである。

まず「統語的局地化」の概念を明らかにしておかねばならない。本論文における「概念構造」とは、Jackendoffのように、単一の節のなかで主動詞のもつ固有の意味に基づく複雑多様な意味関係を取り込んだ表示 (representation) ではなく、意味の最小のまとまりを節 (clause) とする構造である。この概念構造が統語的に実現される際生ずるのが、概念構造の統語構造への「投射」(mapping)、あるいは概念構造と統語構造の「対応」(correspondence)の問題である。さてこの統語的実現にあたっては、概念構造における関係が統語構造に直接反映されるのが最良 (optimal) である。例えば、

(1) ...V_i [s ... NP ...]_i

のような、主節の述語動詞が埋め込まれた従属節を一つの項のように従える概念関係があるとすると、最良の統語的実現形は、概念構造がそのまま統語構造に実現された

(2) ...V_i [s ... NP ...]_i

のようなものである。ところが、統語的実現形のなかには、この最良の対応を欠いたものが数多く存在する。その中心となるのは、主節動詞が、従属節の一部である名詞句と、統語的に直接関わりをもつようになっているケースである。

(3) ...V_i [s ... NP_i ...]_i

ここに統語的・意味的な並行性のずれが生じることになる。(3)の統語関係は、このままでは完全な統語的実現形ではない。VとNPが統語的に結びつくには、少なくともある段階で、「隣合った」(adjacent)位置に置かれることが必要である。それを実現するのが「統語的局地化」という過程である。この過程には、「上昇」「繰上げ」「付加」「固定化」の4つのストラテジーが存在する。しかし、これだけでは必ずしも統語的実現形ができるわけではなく、場合によってはそれに付随する統語的調整が必要である。

つまり、本論文における「統語的局地化」とは、一言で言えば、概念的内容を統語上決まった「枠」(frame)に「(むりやり)押し込む」ことである。仮に、概念構造が「丸い」ものであり、統語構造が「四角い」枠であるとすれば、概念構造を統語構造に押し込んだ場合、どこかに隙間ができる。その隙間を埋める過程が統語的な調整にあたる。一方、意味の側面から言えば、統語的局地化とは、ある統語的構成要素の一部分がその構成要素が表すはずの意味単位全体を代表するという、いわば文法的「代喩」(synecdoche)として捉えることができる。

さて、本論文はB5判総頁数264頁(本文249頁、引用文献10頁、英文要旨5頁)、400字詰原稿用紙約635枚に相当する長さであり、3部13章から成る。第I部(第1, 2章)は、具体的な分析をするにあたって本研究が依って立つ理論的背景と方法論を提示する。第II部(第3章-第11章)は本論文の中心部分であり、統語的局地化を経て派生したと思われる多様な統語構造、構文を分析する。第III部(第12, 13章)においては、第II部で得られた結果をまとめ、統語的局地化がある種の「操作的ストラテジー」と「統語的調整」とから成る複合プロセスであることを主張するとともに、言語研究におけるその意義づけが行われる。

第I部は2つの章から成る。第1章では、これまでの変形生成文法研究の成果をふまえ、統語的・意味的対応関係から論を起す。すなわち、文法が意味と形式を結ぶという伝統的な視点から、意味論と統語論は対応するのが最良の関係であり、それが言語の本質を規定する原則の一つであることを述べる。この対応関係は、概念と表現形式に関わる最も基本的な部分に限定される。具体的には、命題が文(S)に対応し、項が名詞句(NP)にあたり、複合命題は統語上複文として実現されるという関係に着目する。そして、何らかの理由でそれを欠く構文がある場合、それ自体が言語学的な興味を引く現象であった事例を挙げ、そこに統語的局地化がはたす役割を示唆する。第2章では、統語的局地化のケースとして考え得る4つの下位プロセス(上昇、繰上げ、付加、固定化)と、局地化によってもたらされる4つの意味的効果(焦点化、意味関係の不一致、意味的付加、意味的圧迫)が挙げられ、分析の手順が示される。

第II部は本論文の中心部分であり、9章から成る。第3章から第5章までは局地化のプロセスとして「上昇」を扱う。代表的な構文は次のようなものである。

(4) The affair ended with *a police officer who was sentenced to four years in prison*.

(5) I don't know *the amount of money he spent on his new car*.

(6) It's amazing *the amount of money he spent*.

(7) The council worked for *improved schools and hospitals*.

(4) - (6)では、斜字体部分が関係節構造をしているが、意味的にはすべて節内容を表す。これらの複合名詞句は、概念的には命題、疑問、感嘆であり、それにふさわしい概念構造を想定し得る。それらを統語的に実現するにあたっては、それぞれ対応する節の一部分である名詞句を節頭(節境界の内部での最上部)に上昇させて、関係節化による複合名詞句形成という統語的調整を通じておこなわれる、と主張する。(7)の斜字体で表されている名詞句は、節の名詞化形(the improving of schools and hospitals)から項名詞句(目的語の役割をはたす schools and hospitals 部分)を統語上の名詞句主要部に上昇させ、修飾部についての統語的調整がおこなわれたものである。

第6章は「繰上げ」に注目する。次のような構文を材料にして、

(8) The audience laughed *the actress off the stage*.

並置された2つの節から成る概念構造を想定する。そして、片方の節(the actress off the stage)の中の主語名詞句が、節境界を越えて繰上げられ、他方の節の文法関係の項になる、と主張する。その結果、The audience laughed.

*The audience laughed the actress. のような対比を説明する「自動詞の他動詞化」の根拠が得られる。

第7章と第8章は「付加」プロセスを論じる。これは、次のような「節」先行詞型および分離先行詞型の関係節構文を実現する際に見られる。

(9) Jane defeated Susan in a game *that sent the classmates into a frenzy*.

(10) A good book is a teacher *that is also a good friend*.

これらは、概念的に節の並置構造をしており、2番目の節の主語(関係代名詞)は、それぞれ1番目の節の内容、1

番目の節の主語 (a good book) を先行詞とする。しかし、統語的実現にあたっては、2番目の節の主語が1番目の節の最後の名詞句に結びついていることから、節を名詞句へ付加する過程を経たものとする。

第9章から第11章にかけては、統語的「固定化」プロセスを論じている。このタイプの局地化は文の統語上の構成要素や意味関係を、表層的に確立された統語的な枠 (frame) にしたがって整え直す、というものである。第9章では、(11) のような文で、

(11) He made a *possibly* too generous offer.

斜字体部の副詞がはたす統語的・意味的役割に注目する。この副詞は意味上文副詞であり、統語的には節内の一名詞句の中の副詞の位置にある。そのため、操作上は、副詞が節の上部または節頭から下部へ移動することになる。もちろん、節を修飾すべき文副詞が構造上文の一部に結びつくという意味的不整合が生じるのであるが、それが可能になるのは、too の前の位置が、副詞という統語的範疇が生じることができるよう保証されているからである、と主張する。

第10章は、節によるコントロールが、統語上、項によるコントロールに置き換えられてしまう過程を明らかにする。

(12) The boat was sunk to impress the king.

(12) の文において、impress の主語をコントロールするのは、概念的には主節の内容であるが、統語的には主節の主語がコントロールするように強制される。その理由は、副詞節の不定詞主語が主節主語に結びつくという、一般的な項コントロールの基準型があり、それに沿って局地化がはたらくからである。

第11章では、次のような when 節に見られる意味的な不規則性を取り上げている。

(13) *When you wave those flags and shout* you send fear into the hearts of your brothers.

この種の when 節は、必ずしも主節の出来事が起こった時を指定するのではなく、前者が後者を語用論的に含意する関係である。この関係を概念構造に表示すると A FROM B の関係になるが、統語的には、B を A の中の「時を表す項」の位置に押し込むという統語的固定化により、統語構造が実現されている、とする。

第Ⅲ部では、統語的局地化の性質がより広い言語学的パースペクティブのなかで論じられる。第12章では、統語的局地化を、「統語的引締め」および「統語的緩和」という、統語的・意味的対応関係を乱すはたらきをする2つの一般的な逆方向プロセスのうち前者に属すると結論する。この2つのプロセスは、いわゆる変形規則ではなく、概念構造が統語構造に実現される際にはたらく表現形式的な過程である。これは、話者の表現上の意図により基準となる統語的・意味的対応関係に乱れが生じる場合にも一定の法則性がある、という視点を可能にする。最終章の第13章では、この研究の結果が、比較表現論など、言語のより広い意味での対照研究に対する、言語構造面からの基盤となる可能性が指摘されている。

論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、英語の概念構造と統語構造の間に見られるある種の並行性の欠如に着目し、意味が統語的に実現されるという立場に立った場合そこにはたらく「統語的局地化」とも呼ぶべき過程の性質およびその意義を明らかにすることであった。本論文の理論的基盤は、大枠において変形生成文法をモデルとしつつも、Jackendoff とは異なり、意味の最小のまとまりを節 (clause) とする概念構造を採用し、さらに概念構造と統語構造に並行性を認める、むしろ生成意味論的とも言うべき立場に立っている。福地氏は、現在の言語理論の最先端の成果を熟知した上で、600を越える英文用例の精密な意味分析を行い、結果として、GB理論のような厳密な規則の体系は求めず、「統語的局地化」という、言語事実に即したよりマクロな視点から、概念構造と統語構造間の説得力ある対応理論を構築することに成功している。

本論文は発想・テーマ・研究方法等における独創性、議論における論理的な一貫性と論文としてのまとまり、文献・資料・実例等の実証性、用語・表現等の明晰性、これらのいずれにおいても優れており、特に中心にあたる第Ⅱ部の

第3章から第11章まででは、福地氏の豊かな理論的知識と鋭い言語感覚に裏打ちされた見事な言語分析が展開されている。こうしたことから、本論文が学界に与える影響はきわめて大きく、今後の研究水準を作るにあたっての重要な文献の一つになることはまちがいないと思われる。本論文の数ある研究成果のうち特に重要と思われる2点を整理しておく。

- (1) 概念構造と統語構造の並行性の欠如とされる言語現象を「統語的局地化」という概念で整理し説明したことは、まったく新しい視点であり、今後の英語統語論・意味論の研究に重要な意味をもつものである。
- (2) 日本語が「緩い」統語構造を好み、「状況中心」の表現をする言語であるのに対し、英語は「引き締まった」統語構造を好み、「人間(物)中心」・「名詞中心」の表現をする言語であると言われるが、本論文は、こうした事象が具体的にどのような言語過程を経て実現するかを理論的に明らかにした。これは、「比較表現学」・「対照言語学」の基礎として役立つ重要な貢献である。

とはいえ、本論文の優れた成果にもかかわらず、この種の先端的な研究にありがちな難点は残されている。例えば、本論文は変形文法を基本的な立場としてとり厳格な枠組みを立てているにもかかわらず、

- (a) 概念構造の性質やその生成の仕方、またどの程度まで概念構造として認めるのか、
- (b) 概念構造を統語構造に変える際に用いられる統語的調整にはどのような種類の規則があり、どの程度一般性があるのか、

等については記述が十分とはいえない。さらにまた、統語的局地化現象を文法的代喩として捉えるならば、全体と部分にかかわる認知の問題がもっと議論されてもよいという意見もあろう。

しかしながら、こうした難点は本論文の欠点というよりか、むしろ今後の言語研究が理論的に課題とする大きな問題の一部であり、決して本論文の卓越した成果を損なうものではない。よって本研究科委員会は、本論文を博士(文学)の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定するものである。